

彼氏にフラれたので

やけくそで高級温泉旅館に

一人傷心旅行しに行ったら

その

若旦那

に見初められて

元カレを忘れさせるくらいの

甘々とろとろ

えっち

が始まりました



「彼氏にフラれたのでやけくそで高級温泉旅館に一人傷心旅行しに行ったらその若旦那に見初められて元カレを忘れさせられるくらいの甘々ところえっちが始まりました」

「この度はようこそおいでくださいました。烏丸屋当主の烏丸千隼と申します」
「あっ……予約していた園山です。よろしく願います……！」

深々と丁寧にお辞儀をされ、その所作の美しさに声が上がってしまふ。

私の事を知る人がいない、とにかく何も考えずに済む場所に行きたくて電車を乗り継いできた。普段の自分なら滅多に泊まることは出来ないであろう、街から少し奥まった場所にある高級老舗温泉旅館。

厳かな門をくぐってチェックインをすると、この、あめ色の和服がよく似合う若い男の人が出迎えてくれた。

「遠いところお疲れでしょう。早速お部屋にご案内しますね」

「あ、荷物……だ、大丈夫です。そんなに重くないので、自分で……」

「いえいえ、お客様に運ばせるわけにはいきません。どうかお気になさらず」

にこり、と柔らかな笑顔を浮かべつつ私が持った荷物をそっと手に取って運んでくれる。

そんなに大層な物じゃないので申し訳ない。と恐縮するも、そのスマートな動きに甘えてしまう。

ゆつくりと私の前を歩き出した烏丸さんの背中を追うように大人しく後を着いていく。

「……………っすごい、写真で事前に見てたんですけど……………建物の中もお洒落で綺麗……………本当に素敵な旅館ですね」

間接照明で暖かく照らされた廊下を歩きながら思わず声が漏れる。

上品かつ歴史を感じさせる重厚感溢れる館内。置かれてるインテリア、飾られてる皿や掛け軸すら一つ一つが高級そうだ。

「はは、ありがとうございます。代々続く旅館ですが、歴史を残しながらも和

とモダンの調和を大切にしているので……そう言って頂けると嬉しいですね」
「……っ」

私の方を振り返りながら、その少し垂れ気味な目元を細めて照れたように笑う顔に思わず心臓がとくと脈打つ。

着物との相乗効果もあつて破壊力がすごい。

（つて、いけない…… “あんな事” があつたばかりなのにときめいてどうするの……！）

ここに来た理由は一人でのにびり過ごして、“ある出来事” でダメージをくらってしまった心の傷を癒すためだ。

ときめきそうになった自分を諫めて、平常心を保ちながら会話を続ける。

「……っあ、そ、そういうば……わたしこういった旅館に泊まるの初めてなんですけど……いつも、こうして当主の烏丸さんがお出迎えされてるんですか？ 他の旅館だと中居さんがされるイメージがあつたので、珍しいなって……」

「ああ……そうですね。ほかの旅館ではそうかもしれません……お客様がい
らした時には出来る限り私が対応しています……烏丸屋を選んでわざわざ足を
運んでくださる方と直接お話できる機会は大切にしたいんです」

「そうなんですか……こんな大きい旅館の当主さんって、きっとお忙しそうな
のに……」

「いえいえ。大層な事を言ってるんですが、まだ新米当主なもので。先代だつ
た父が早々に隠居をしたのに際してこの旅館を引き継いだんですが……昔から
馴染みのあるお客様や従業員からは未だに若旦那なんて言われてるんですよ」

「もう跡取りじゃないんですけどね」そう言って、ぽりぽり頬を搔く烏丸さん。
ちよつと困ったように眉を下げる表情に小さく笑ってしまう。

きつとこの旅館にくるお客さんは私を例外として富裕層の人達ばかりだろう。
その若さで評判を落とすことなく旅館を切り盛りしているのはとても凄い事
で……。シンブルに尊敬してしまう。

「そういえば、園山様はこちらには観光で？それとも本日は何かご予定があつ
たのですか？」

「えっ……！あ、えと……」

「あ……もし答えづらい事を聞いてしまったのならすみません。当旅館を利用される方はご年配のお客様が多いもので、園山様のような女性お一人での宿泊は珍しく……つい聞きたくなってしまうして……」

不意にきた質問にどう答えようか、一瞬口ごもってしまった。

そんな私の様子にすぐ気がついて謝ってくれるも、烏丸さんの疑問は至極当然だと思う。先程からちらほらすれ違うお客さんも私より幾分も年上の上品な人達ばかりだ。

「いや、そんな、お氣になさらず……！……ただ、ちょっと最近色々あって疲れちゃって……一人でのんびり過ごしたくなって……烏丸屋さんはテレビやネットでもよく紹介されてて以前から氣になってたので、少し背伸びをして予約をしたんです」

流石に本当の事全部は言えないけど嘘では無い。実際この旅館にはいつか泊まってみたいなあと思っていたのだ。まあ……まさか一人で来る事になるとは

思いもしなかったけど……。

「ああ……そうだったんですね。こうして、園山様のような若い方もこの旅館に興味を持って頂けて本当に嬉しいです」

あはは……と、ぎこちなく笑みを浮かべる私にそれ以上深堀をすることなく、穏やかに返してくれる烏丸さん。きつと何か察するものがあつたかもしれないのにその優しさにほっと安心する。

「うちの温泉は疲労回復の効能もあるので、ぜひゆっくりしてくださいね。料理はお部屋にお持ちしますし、まったり過ごせる茶室などもありますので……これを機にのんびり羽を休めてください」

「はい……！そうします。楽しみです」

「あ……あと、それなら……」

「？」

ふと、烏丸さんが何かを思いついたように立ち止まった。

どうしたんだろう？不思議に思いながら見上げていると少し身をかがめて耳元でそっと囁かれる。

「…………園山様、もしよければ部屋に着く前に少し寄り道をしてもいいですか？ぜひ、見せたい物がありまして……」

「…………へ…………は、はい」

ぼそり、と囁かれる吐息混じりの低い声に耳が熱くなった。

体を跳ねさせながら咄嗟にそう答えると、烏丸さんが「こちらへどうぞ」と優しくエスコートしてくれたのだった。



「歩かせてしまつてすみません。疲れていないですか？」

「いえ、全然大丈夫です。ただ、どこに行くのかなつて氣になつてはいますけど」

正確な現在地は分からないけど、どうやら建物の外れの方に来ているようだ。私を氣遣う烏丸さんと並んで廊下を進む。

どこに向かつているのか皆目見当もつかないけど、特に予定もないので好奇心のままに後を着いていく。

「はは、それはもうじき分かります……ちようど今着きました。園山様、外を見てください」

「……………」

人氣のない渡り廊下に出たところで烏丸さんの足が止まった。今は六月。梅雨真っ只中なので、外はしとしと雨が降っている。

こんな天気の中で見せたいものとは……？と思いつつ言われた通り外の景色

に視線を移すと

「わ……！綺麗……」

そこには地面一体を埋め尽くすほどの、色とりどりの紫陽花が咲きほこっていた。

ぴんく、水色、青、白。色の絨毯のような美しい光景に思わず息を呑む。

（すごい……こんなに沢山の紫陽花……初めて見た）

降り注いでいる雨が紫陽花とマッチしていて演出のようにすら見える。

これだけ数が多いのに一株一株が綺麗に剪定されていて、素人から見ても普段から丁寧にお世話されている事が伝わってきた。

「先々代……もう既に他界しているんですが私の祖父が植えたものです。ちょうど今が一番見頃なんです、いかなせん建物の離れに位置するので……中々お客様の目に触れる機会がないんですけどね」

「そんな……こんなに綺麗なのに……！独り占めするには勿体ないくらいの景色です……！」

「ふ、喜んで頂けてよかった。私もこの場所が一番好きなんです。毎年この景色が見れるように仕事の合間に手入れをしてるので……園山様にそう言ってもらえて嬉しいです」

「えっ……庭師の方とかではなくて、烏丸さんがお手入れしてるんですか？それでこんなに色とりどりの紫陽花を咲かせられてるなんて……凄いですね……」

「いえいえ、祖父がやってた事を引き継いだだけです。でも、そうですね……紫陽花は土壌によって花の色も変わることから、花言葉も『移り気』や『浮気』といった少しネガティブな言葉なんです……それを跳ね除けてしまいうくらいの景色を見せてくれるので……全然世話も苦ではないんですよ」

「……っそ、そうなんです……」

心変わり……。その花言葉にちくん。と小さく胸が痛む。けれど、烏丸さんの愛情がこもった色とりどりの紫陽花達は本当に美しくて。

肩を並べて景色を眺める、穏やかな時間が過ぎていく。ポツポツと降り注ぐ雨音が心地いい。

きつと何やら訳ありそうな私を元気づける為に連れてきてくれたのだろう。目の前の光景はもちろん、烏丸さんの優しい気遣いが心に染み渡っていく。

「……紫陽花は祖母が大好きだった花なんです。祖父と結婚してこの旅館を一緒に切り盛りしていく、と決めてくれた祖母の為に祖父が植えたのだとか」

「そうなんですか……これだけの株を植えて、管理するのは大変だったでしょうに……きつと、烏丸さんのおじい様はおば様の事大好きだったんですね」

「ふっ……そうなんです。孫の私から見てもわかるくらい、ベタ惚れで。それこそ、心変わり、なんて言葉とは無縁なおしどり夫婦でした。晩年になっても、六月になると二人でよくこの場所で景色を眺めてましたよ」

そう言って懐かしむように目元を緩ませる烏丸さん。

きつと本当に仲のいい夫婦だったのだろう。この美しい景色がおじい様からおばあ様への愛で出来ているということに胸が熱くなる。

——私にもいつか、そんな人に出会えるのだろうか。

「……………」

「っ!!園山様、どうかされましたか」

突然、烏間さんが慌てたような声を上げた。

どうしてそんな事を聞くのが分からず、きょんとしていると袂から手ぬぐいを出して、そっと私の目元に押し当ててくれる。

「あっ……す、すみませ……」

じわりと生地に液体が吸い込まれる感覚。そこでようやく自分が泣いていることに、気がついた。

「気分が優れませんか？それとも、私の話が何か気に障ったのならすみません」

体をすこし屈めて、心配そうに顔を覗き込まれる。

止めたいのに、突然流れ出した涙は自分自身でもコントロールができない。恥ずかしさと動揺のまま、つい正直に理由を話してしまう。

「い、いえ……烏丸さんのせいじゃないです……先程のおじい様とおばあ様の話も……凄く素敵だなんて思ったんです……ただ」

「……ただ？」

「……私もいつか、お二人のようにかけがえのない相手と会えるのかなって……今は、正直全然そんな気がしなくて……」

「園山様……」

「つて、すみません……！急に泣いたりなんてして……っ、じ、実は二年近く付き合ってた彼氏の浮気が発覚して……別れちゃったんです……彼氏も、浮気相手の女の子も同じ会社だったので、これから顔をあわせるのがキツくて……会社を退職をしたのを機に、こうして傷心旅行に来たんですけど……っ、だめですね。まだ、全然吹っ切れて無かったみたいです」

元彼は同じ会社の同僚で同い年の人だった。一緒にいると居心地が良くて、喧嘩をする事も少なくいい関係だった……と思う。付き合ってた二年の記念日が近づいて、このまま結婚するのかなあゝなんて浮かれてて。

結局そう思ってたのは私だけで……今年の四月。新卒で可愛い後輩が入った途端、あっさり乗り換えられてしまった。

（あゝ、私のバカ……なんで泣いたりしちゃったんだろう……急にこんな話をされて、きつと烏丸さんも困ってるよお……）

先程までの穏やかな時間に時計の針を戻したい。こんな、しみったれた自分の身の上話なんかするつもりじゃなかったのに。

烏丸さんの穏やかな雰囲気がそうさせてしまうのか、すっかり詳細を話してしまった。

せめて、場の空気がこれ以上重くならないようにしようと、なるべく明るい声のトーンで乗り切ろうと試みるもなんだか空回りしてる気がしていたたまれない。

「~~~~~って、こんな話されても困りますよねっ！ほんと、驚かせてすみませ……っ!!」

恥ずかしさと申し訳なさで烏丸さんの顔が見れないでいると、不意に軽く腕をひかれる。

温かい体温と微かなお香の匂い。背中にまわされた腕の感触に自分が抱きしめられている事に気がついた。

「へっ……？か、か、からすまさ……っ!？」

「それは……本当に辛い経験をされましたね」

「……っ」

「今日会ったばかりの私に言われても信じられないかもしれませんが……葉月さんは素敵な女性です。その笑顔が似合う可愛いらしい容姿も、大きな瞳をキラキラさせて紫陽花を眺める表情も……とても魅力的な方だなと思っています」

「っ!!」

突然の出来事に涙が引っ込んだ。私を労わるように背中をゆっくりさする大きな手。

葉月さん。と、苗字ではなく下の名前で呼ばれて、お世辞かもしれないけど……その甘い声で褒められて。心臓がバクバクと脈打つ。

「今はまだ前向きな気持ちになるのは難しいかもしれません。……が、葉月さんにとって、唯一の存在になる男性にはきつと出会えるはずです。それまでどうか当旅館でゆっくり心の傷を癒してください」

「烏丸さん……」

烏丸さんの言葉がじんわりと染み込んでいく。

口先だけではない、本心で言ってくれてるのがその真剣な表情から伝わってきて。後ろ向きになっていた気持ちが和らぐ。

「気持ちが悪くまで、一泊といわず何泊でもしていただいて構いません。もちろん、私の権限でその分の料金もいただきますから」

「……っふ、ふふ……烏丸さんも冗談を言うんですね……そんな魅力的なこと言われたら本気にしちゃいますよ？」

と思っていたらその真剣な表情のまま冗談を言われて、小さく吹き出してしまった。

「冗談じゃないんですけどね」

「？」

「いえ、なんでも……葉月さんはそうやって笑ってる顔が一番素敵だと想います」

「……っ、あ、ありがとう……ございます……」

さらに、と言われて心拍数が上がった。

……きつと私の顔は今真っ赤に染まっていると思う。烏丸さんはお客さんである私をただ慰めてくれただけで、きつとそこには他意はない。だから勘違いしちゃいけない……のに。

しとしと、と雨が降りしきる中、暫くその腕の中から抜け出すことが出来なかった。



「……………ん、あれ……………寝ちゃった……………？」

あの後、烏丸さんに部屋を案内してもらって、部屋付きの露天風呂にこれまた豪華な食事を思う存分堪能した。

おひとり様旅行の特権で誰もいないのをいいことに、お腹がいっぱいになって畳の上に寝転んだところまでは覚えてる。

「わ……………結構時間経ってる」

時間を見るともう二三時を過ぎた頃だった。

熟睡したせいで変に目が覚めてしまったので、このまま布団で二度寝も難しいな……………と、どうしようか考える。

——ふと、そういえば烏丸さんから、旅館内に夜空が綺麗に見渡せる露天風呂があるという話を聞いたのを思い出した。

『——各お部屋にも露天風呂がついていますが、もしお時間があればそちら

も利用してみてください。今日は夜までには雨が止む予報ですので、きっと綺麗に見えると思いますよ』

(……確か時間帯によって男女入れ替わりって言ってたような……女子は確か……二四時？までだっけ……？まだ間に合う……！)

窓から外を確認すると、烏丸さんの言っていた通りもう雨はやんでいるようだ。折角おすすめしてくれたので、ぜひとも湯船に浸かりながらその星空を堪能したい。

(体が温まったらそのままぐっすり眠れそうだし)

そう考えながらいそいそと準備をして、部屋を後にしたのだった。



「わ……………！本当によく見える……………！綺麗！」

キラキラと夜空に無数に輝く宝石。

満点の星とはまさにこの事と言わんばかりの景色に目を奪われる。

ゆつくりと足先から湯船に浸かり、美しい光景を眺めながら、ふう……………と一息をついた。

（あ……………気持ちいい……………遅い時間だからかな？私以外誰もいないや……………）

貸切のような状況にラッキーだなくと思いつながら、まったり湯に浸かる。

最高級のおもてなし、美しい景色に、美味しいご飯、温泉を堪能して。この旅館で一日過ごしたおかげで、来た時よりも随分と気持ちが楽になったような気がする。

（あと、烏丸さんも理由の一つだなあ……………目の前で泣いちゃったのは恥ずかしかったけど……………あんな風に優しく慰めてもらえて、嬉しかった……………）

忙しい人だと思うからまた会える保証はないけれど……帰る際にまた改めて謝罪とお礼を言いたい。

そう、ぼんやりと星空を眺めていると露天風呂に続く脱衣場の方から物音が聞こえてきた。どうやら他の誰かが来たみたいだ。

（私と同じで滑り込みで露天風呂に来た人かな？なるべくすみっこに移動しよ……）

そう思い湯船から立ち上がった瞬間、脱衣場の扉が開いて

「……………え、か、からすまさ……………っ!!」

「っ、葉月さんっ!?!」

目の前の光景に目を疑ってしまった。

そこには私と同じように、目を見開いて驚いた顔をした烏丸さんが立っ
て。
て。

「えっ……えっ!？」

「っあ、あの、どうしてこの時間に……? ちょうど点検に来たんです……が……」

「あ、あれ?……い、今は女性が入れる時間じゃ……?」

「っ! あっ……葉月さん、もしかして入浴時間を勘違いされてますかね? この露天風呂は二三時までが女性の入浴時間でして……それ以降は朝の五時まで閉鎖しているんですが……」

「えっ……~~~~~す、すすすみません!!」

（ううううそ……! 時間、勘違いしてた……っ!? て、いか今の私の格好……っ!!）

人がいなかったのも当たり前だ。恥ずかしすぎて穴があったら入りたい。タオルで前を隠しながら慌てて湯船から出ようとしたその時。

「っあぶない!」

「ひゃ……っ！」

ずるり。と足を滑らせてしまい、体がよろめく。

烏間さんが素早くそのまま転びそうになった私に駆け寄り、正面から抱きとめてくれた。

「っ、す、みませ……あっ……~~~~~」!!

「っ！」

その拍子にはら……と体を隠してたタオルがはだけ湯船に沈む。

完全に何も身につけていない、素っ裸の状態になってしまい、声にならない悲鳴をあげた。

（タオルが……っ!! えっ、えっ……か、烏丸さんに、裸見られてる……っ!! ど、どうしよう、とりあえず脱衣場戻って服を……）

自分の勘違いが原因だけど、まさかこんな事になってしまうなんて。

パニックになつて頭のまま、まずは服を着る事を最優先しようと私を抱きとめたままの烏丸さんの腕の中から離れようとする。

「っ、すみません、時間勘違いしてました……っ！見苦しいものも見せてしまつて……す、すぐ着替えて出ていきますので……っ！」

「……………」

「烏丸さん？なので、あ、あの……う、腕を」

解放して欲しい。とアピールするように軽く身動きをしてみるも返事はない。どうしたんだろうか。頭はますます混乱してしまふ。不思議に思いつつ、真つ赤になっている顔を上げて烏丸さんの表情を見ると——ぞくり。とした。

「……烏丸さん？」

優しく微笑んでいるのに、昼間話した時とは何処か纏う空気が違う。まるで獲物を捕まえた捕食者のように爛々と輝く瞳に少しだけ怖くなってくる。

「ど、どうしました……あっ……♡」

すり……♡

と背中に回っていた掌がゆっくりと体のラインをなぞっていく。背筋を指で軽く触れながら、徐々に下に降りていき、腰……というよりお尻の上ギリギリを撫でられて熱い手の温度に小さく声が漏れてしまう。

「ははっ……可愛い声……少し体を撫でただけなのに……敏感なんですね……」

「っ!!」

耳元で色っぽく囁かれて体温が急上昇していく。急な烏丸さんの変化に思考が追いつかない。

「昼間、あの紫陽花の前で話した時からずっと貴方の事が頭から離れませんでした」

「へ………」

「あの涙を見た時に……どうしようもない焦燥感に駆られたんです。私……いや、俺が、その傷を埋めれたらいいのにつて」

「……っ」

「付け入るような真似をしてすみません。でも、据え膳を無視できるほど出来た人間ではないので」

「っ!!」

ちゅ………♡

そう言っつて首筋に軽く吸い付かれる。

頭の中は相変わらず大混乱で、ただ、烏丸さんの着物をぎゅ……っ握りしめて固まってしまう。

(こ、これは……夢じゃない……よね？今の言い方だとまるで、烏丸さんが……私のこと……)

「……あ、あの……っ」

「いっぱい気持ちいいことで頭の中とろとろにして……嫌だったこと全部忘れ

ましようか」

そう甘く囁かれて――抱きしめられている腕を振りほどくことはできなかった。



すり……すりすり♡

「は……♡あ……っ♡」

「……乳首こうやって、指の腹でよしよしってされるの好きですか？最初は控えめだったのに、撫でる度にむくむく膨らんできて、弾力ができましたね」
「……っ、や……は、恥ずかし……」

その後、湯冷めしちゃうので、とお風呂のフチに座らされた。膝から下は湯船に浸かりながら正面に立つ烏丸さんに乳首をゆっくり撫でられて。

「恥ずかしく思う必要ありませんよ。葉月さんの体がちゃんと快感を拾えてる証拠です」

「で、でも……あっ♡」

「ほら、背中丸めて逃げようとしなないで。可愛い勃起した葉月さんの乳首、もつと俺に見せてください」

「ひっ……♡あ……カリカリしちゃ……っ♡」

恥ずかしさに身を引こうとしてしまうと、きゅう♡と指先で先端を摘まれて背中が仰け反る。

そのまま爪で乳首をかりかり引っ搔かれて、甘い痺れが全身をじんじん巡っていく。

カリッ♡カリカリ……♡くりゅ♡

「ふっ……あ、ああ……っ♡……あっ」

「そう……ちゃんとおっぱいを突き出して……はは、淡いピンク色だったのが充血して真っ赤に染まっていますね……ビンビンに勃起あがった乳首、こうして不規則に爪でカリカリされて……時々指で先端を押し潰されるの気持ちいいですか？」

「~~~~っ♡……っは、い……き、気持ちいいです……っ♡」

「ふっ……よくできました」

「ひゅっ……♡」

読めない指の動きにただただ翻弄される。

快感が走る度に体を跳ねさせてしまうので、その度にぱしゃりと水面を揺らして烏丸さんの着物に水しぶきが飛んでしまう。

「か、からすまさん……あっ♡き、着物、濡れちゃいます……っ♡」

烏丸さんも膝下まで湯船に浸かっている状態だ。折角裾を捲りあげて濡れないようにしているのに、私が反応する度にその上等そうな着物を濡らしてしまつて焦ってしまう。

「ああ、大丈夫です。替えはありますし……正直今気にしてる余裕なくて。それよりも……葉月さんの気持ち良くなってる表情がもっと見たいんです」

カリカリカリカリ♡きゅう……っ♡

「く……う………んっ♡」

また不意に両乳首を摘まれる。予測できなかった快感に子犬が甘える時のよ

うな声が漏れて恥ずかしい。

「はは…今の声も可愛いかったです。葉月さん本当に乳首弱いんですね」

「あ……♡で、でも……な、なんか、私おかしくて……烏丸さんの指で乳首弄られると……頭ビリビリして……勝手に体、気持ちよくなっちゃう……♡
までこんな風に、感じちゃう事なかったのに……♡」

「っ……！」

元彼とのセックスの時はこんなに甘い声が漏れることはなかった。その当時は彼のことが好きだったから、そういう行為も頑張っただけで……
……

今日はどこか違った。烏丸さんに触れるところ全部が気持ちいい。乳首をカリカリされる度甘い疼きが募っていく。この突起を弄られるだけでこんなに感じてしまうなんて。

「はは……すっごい殺し文句。例の元彼さんにしっかり開発されたのかと思って、実は少し嫉妬してました」

「そ、そういう訳じゃ……あっ♡」

「つまり俺に触れられてるせいでいつもより気持ちよくなってるって事ですもんね……正直、そんなこと言われて自惚れそうです……ん、ぢゅ……♡」

「あっ！♡……っふ、う……っ♡ち、乳首、舐めちゃ……お、おなかの下、キュンってしちゃう……♡」

「ん、ダメですか？びんびんに勃起していたので、こうして……ぢゅ……っ♡唇で挟んで……ぢゅ、ぢゅ……っ♡吸って欲しいのかと」

「ふうっ♡あ、ああっ！♡だ、ダメじゃないですけど……っ、こ、これ、し、げき、強いぃ……っ♡」

ちゅ♡ぢゅ……♡ぢゅっ、ぢゅうっ♡♡

舌を這わしながら、強弱をつけて熱い口内に吸い付かれる。

乳首をちゅうちゅうされる度に体が跳ねて、えっちな声が止まらない。

「あ……もう片方の乳首、寂しくさせちゃってましたね、すみません。こっちもまた、先端を指でカリカリ引っ掻いてあげますね」

「ああ……！♡は、あ……っ♡か、烏丸さん……き、気持ちいい♡一緒にさ

れるの気持ちいい……っですう……っ♡♡あ、乳首、ぶりぶりしちゃ……」

「気持ちいいですか？素直に言えて葉月さんはえらいです……こんなに弱かったら、そのうち乳首だけでもイける日がきそうですね……ん」

「そ、そんな事、できな……は、あ~~~~っ！♡」

れろ♡ちゅっ♡ちゅぐ♡ちゅぢゅ……っ♡

カリカリ♡カリッ♡

どんどん増幅していく快感に自分の体じゃないみたい。

絶え間なく与えられる刺激に首をガクンッと後ろに仰け反らせながら、間延びした喘ぎ声がでてしまう。

「っはあ……吸われたせいで、先端がぼってり大きくなってきた……このまま乳首イキできるまで続きをしたいのも山々なんですが……」

「あ……っ！♡」

「そろそろ、こっちも触れてあげないと可哀想ですね」

「ふ……っ♡」

すり……♡と下腹部よりもつと下……に手が伸びていく。これからどこを触られるの察してしまつて、つい反射的に足を閉じてしまった。

「そ、そこは……」

「恥ずかしいですか？大丈夫……気持ちいい事かしませんから。それに……乳首を愛撫してた時、ずっと太もも擦り合わせてもじもじさせてましたよね？」
「っ……！」

「体の熱が溜まつて辛いんじゃないですか？最初に言つた通り、恥ずかしがる必要なんてありません……嫌なこと全部忘れるくらい、気持ち良くなることしか考えられなくなってください」

「ふ……う……烏丸さん……♡」

すり……♡すり……♡

足を開くのを促すように、烏丸さんの手が太ももを撫でていく。

あんなにいやらしく乳首をカリカリ引っ掻かれて、敏感になつて先端を吸われて。指摘された通り、もうこの熱を解放したくてたまらなくなつていて。

（恥ずかしいけど……おまんこ、むずむずして辛い……っ♡か、烏丸さんに、恥ずかしいところ、いっぱい触られて……もつと、気持ち良くしてほし……っ）

「……っ」

ちやぶ……と水音を立てながら、おずおずと足を広げた。

「ありがとうございます……あぁ、もう愛液がたっぷり出て……ぬるぬるになってますね」

「ご、ごめんなさ……」

「あぁ……謝らないでください。こんなに感じていただけで、感無量です………ただ」

「ただ……？っ、ひゃっ!!」

「照明が薄暗くて……せっかくのおまんこがよく見えないので………こうして足を開いてください」

ぐい、と膝の裏を持ち上げられて、M字に開脚される。そのまま湯船のフチ

に足をつかされ、ぱっくりと烏丸さんにおまんこを晒すような格好にされてしまった。

「こ、これ……っ」

「ふ……この体勢だと月明かりに照らされて良く見えますね。葉月さんのおまんこの入口がくぱくぱ物欲しそうにしながら……とろりと愛液を滲ませてるのもしっかり見えて……」

「い、言わないで……え……」

まじまじと秘部を観察され、ヒクッ♡と入口を収縮させてしまう。

「クリトリスも……ああ、すごい……もうぷっくり勃起してる。触ってほしいって一生懸命主張して……健気で可愛いです」

「……っああ♡く、クリきた……あ……っ♡」

くりゅ♡くり♡くりくり♡

親指で上から押し潰すように触れられ大きい声が出た。待ち望んでいた刺激

に太ももをぶるぶる震えさせて悦んでしまう。

「あ、ひ…………い…………っ♡き、気持ちいい…………か、烏丸さん…………く、くり気持ちいいですう…………っ♡あっ、これ…………好き…………っ♡勃起したクリ、指でこねこねされるの好き…………い…………っ♡」

「良かった。遠慮せずこのままたくさん気持ちよくなってくださいね」

「あ、あ…………っ！♡♡」

指が小刻みにクリトリスを刺激してくる。ぬるぬるになっている指の腹で左右に擦りあげられて、おまんこの入口からとびゅ…………♡とまた愛液を滲ませてしまう。

「あっ♡か、からすまさ…………っ♡指の、う、動きが、速くなって…………え♡」

「あ…………急でしたかね？すみません…………葉月さんのその、快感に染まりきった顔が可愛らしくて…………このままイキ顔も見たくなくてしまいました」

「へ…………っ？♡あっ！♡ふ、づ…………そんな風に触れられたら、あ…………イクっ♡簡単に おまんこ イッちゃいますから あっ♡♡」

くにゅ♡くりゅくりゅくりゅ♡

すみません、と言いつつもその声には愉しさが滲んでいて。目元を緩ませながら、私の痴態を眺める烏丸さん。

こんな綺麗な人に敏感な突起を愛撫されて、絶頂に導かれてするという事に興奮している私がいて。

「ん、くう……っ♡あっ♡やだ、これ、キチャうづっ♡♡」

はしたない私の体は着実にイク準備をし始める。

(あゝっ♡ま、前の彼氏の時はこんな風に思わなかったのに……っ♡も、いま、頭の中、クリイキすることしか考えられない……っ♡♡)

「烏丸さん、も、イクっ♡クリ弄られたら、すぐ愛液でちゃう、よわよわのおまんこ……っ♡イキそうで……す……っ♡は、あっ♡♡」

「ふ……腰がくがく震えてるのでよく分かります。もっと前に突き出して……」

そうです、おまんこがより見えるように……溜まってる熱全部解放しましょう」
「っ!?!♡ひっ……あっ!♡」

腰を抱えられて、よりおまんこを強調する体勢にされてしまう。

不意に、動きが変わった。先程までとは違い、指の先でクリトリスを摘まれたかと思うとそのまま上下にしごかれる。

「あ……っ♡は、あ~~~~っ♡♡くり、シコシコされて……ぞ、刺激っ、つよいびっ♡や、やあ……っ♡あ~~~~っ♡」

「こんなに勃起したらもうおちんちんですね。葉月さんの真っ赤に充血してるクリちんぽ、こうやって……指で上から下までなぞって……よしよししてあげましょうね」

「ひっ♡ひい……っ♡あっ、ああっ!♡う、う~~~~っ♡♡」

(だ、だめ、も、イクッ♡おちんちんみたいにクリしごかれて、烏丸さんの前でイッちゃうぞ……っ♡)

ぬち♡くちゅ♡くちゅくちゅ♡ぬりゅ♡

クリちゃんぽ、だなんて烏丸さんの上品な雰囲気からは想像できない、卑猥な例えをされて自然とお腹の下に力が入る。

足の指先をぎゅ……♡と丸めて、込み上げてくる快感に体が備え始めて。

「イッてください、葉月さん」

ぐりゅっ♡

「あっ！ああっ！♡烏丸さん、ご、ごめんなさ……っ♡イクっ♡イッちゃ……あ~~~~っ！！♡」

ビクッ♡ビクビクビクビクッ♡♡

烏丸さんにそう囁かれた瞬間、頭が真っ白になる。熱が弾けて、ガクガク全身が跳ねるのを抑える事ができない。

「あ、あ~~~~……♡はっ♡はあ……♡♡」

「はは……葉月さんのイキ顔本当に可愛い……顔真つ赤にして、目見開いて……そんな顔をされたらどんな男もそられるでしょうね」

「……はっ、あ……♡」

ヒクッ♡ヒクッ♡とおまんこが未だに収縮して収まらない。

きつと今の私の顔は汗やら涙やらでぐちゃぐちゃだと思うのに。愛おしそうに頬を撫でられて、その表情に胸がどきどきしてしまう。

（まだ、お腹の下……小さくキュンキュンしてる……こんなに気持ちいい事知らない……っ♡）

頭がぼーっとして、思考が回らない。

はあはあと息を整えてると、烏丸さんの指が、おまんこの入口をゆっくり撫で始めた。

「きゃ……っ♡ま、待ってください……さっき、いったばかりだから……あ……っ」
「でも、葉月さんのここずっどヒクヒクしてますよ？絶え間なく愛液を垂れ流

して、ナカ、埋めて欲しそうにしてる」

「あっ……♡ふ、ぐ……っ♡」

つぽ♡つぽ♡

烏丸さんの指が弄ぶように、入口を浅く抜き差ししてくる。今挿れられたら、しとどに濡れたそこはもう簡単に奥まで飲み込んでしまうだろう。